



学校だより

かさぎ6月号

令和4年6月

曾於市立笠木小学校



平等な財産

校長

野村佳史

梅雨入りし、じめじめした毎日が続いています。子供たちにとっては、外で思い切り遊ぶこともできず少し嫌な季節かもしれません。そんな梅雨の真っ只中ですが、沿道に咲く色とりどりのアジサイに心が癒やされています。

ある雨の日のこと。昼休みに子供たちが体育館で遊んだ後、体育倉庫を覗いてみると、高学年の子供たちがバドミントンラケットの一つ一つカバーをして、丁寧にラケット入れに並べていました。私は、後始末もそこそこに体育館を出て行った子供たちに課題（指導が行き届いていなかったことを反省しています）を感じながらも、次に使う人のことを考えて整理整頓を心がけているその姿に、さすが高学年とうなずくことでした。

話は飛びますが、6月10日は「時の記念日」でした。「時の記念日」が制定されたのは、大正時代にさかのぼります。当時は、欧米諸国から日本人は時間の感覚に乏しいと見られていたようで、時間に関心を持ち、規律正しく効率的な生活を習慣化する啓発の意味があったそうです。今では、世界の中でも日本人は時間に正確な国民というイメージが定着していますが、このような時代があったことは意外でした。

時間は誰にでも平等に与えられているにもかかわらず、年齢やそのときの気分によって感じる時間の長さは違うような気がしてなりません。調べてみると、時間の感じ方についてはいろいろな研究がなされていることが分かりました。千葉大学の一川誠准教授によると、新陳代謝と関係があり、身体の状態が活発であれば、心的時計は早く動くというのです。そのため、実際の時間の流れがゆっくりと感じることになるようです。ということは、今より新陳代謝がよかった子供時代の時間はゆっくり流れているように感じていたということかもしれません。また、百田尚樹氏は著書「新・相対性理論」において、人類の発明品は、有意義な時間を生み出すために作られたものであるということを述べています。洗濯機や炊飯器、新幹線や飛行機などがそれに当たります。これらの発明品のおかげで、昔に比べて人の持ち時間が増えたということになるわけです。前述した、バドミントンラケットを整理整頓していた子供たちは、次に使う人のために自分の時間を使ったということになり、一見、不公平感を感じるかも知れませんが、それは決して無駄な時間ではありません。なぜなら、整理整頓された用具を気持ちよく使う人がいるからです。ペンシルベルニア大学ウォートンスクールのキャシー・モギルナー氏の研究では、他人のために時間を使うと、時間がゆっくりと流れる感覚を味わい、「自己効力感（自分は絶対で
きるという気持ち）」が高まるということが分かったそうです。つまり、他人のために時間を使うと、自分の時間が増えたように感じられ、何ごとにも意欲的に行動できるようになるということです。ラケットを整理整頓するという、ほんの2～3分の行動だったかもしれませんが、それが自分にとって価値のある時間に生まれ変わったということになります。

時間は一人一人に平等に与えられた財産です。時間の価値を意識することで、より充実した日々を送ることができるのではないかと改めて思うことでした。



